The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	レベル差があるクラスにおける発話を促す活動
Author(s)	藤井, みゆき
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2020, 18, p. 55-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

レベル差があるクラスにおける発話を促す活動
Speaking Activities for Multi-Level Classes

藤井　みゆき

【要旨】

2019年度のUプログラムの選択必修科目「口頭表現」には、4つのクラスの異なるレベルの受講生が混在する。本稿では、その「口頭表現」のクラスで行った発話を促す活動の紹介と考察を行った。授業では、主教材によって学習のレベルを固定せず、受講生の発話を促すために、活動に応じて学習素材を準備し、彼らが協働で学ぶ活動の形態を多く取り入れた。行った主な活動は、ディスカッション、映像を用いた活動、発表担当者と教師によるニュースの紹介、国内の観光地の調査・報告、漫画や歌謡曲を用いた活動、絵を見て台本を作成する活動等であった。

活動内容に関するアンケートを行ったところ、全ての受講生から「非常に勉強になった」「大体勉強になった」という学習についての肯定的な回答が得られた。異なるレベルの学習者に対する授業では、毎回全ての人を満足させることは困難なことであるが、教師は受講生の関心が高い話題の素材を用意し発話を引き出したり、仲間同士で学ぶ機会を与えたりする等の工夫が可能である。

1. はじめに

大阪大学日本語日本文化教育センターにおけるUプログラムは、「日本の大学で学部教育を受ける国費学部留学生を対象とした１年間の予備教育プログラム[1)]」（大阪大学日本語日本文化教育センター ホームページ 学部留学生プログラム［U］より）で、「大学での勉学に必要な知識と高度な日本語能力や技能を身につけること」（同ホームページ）を目的としている。

筆者は2018年度秋～冬学期から2019年度までＵプログラムの選択履習クラス（上級クラス）のＵ１～Ｕ４の学生を対象にした選択科目の一つである「口頭表現」を担当している。習熟度の異なる学習者に対する語学の授業は、現実的に少なからず起こりえるが、本研究で取り上げる2019年度の授業では、４つのクラスの異なるレベルの学習者が混在していた。本稿では、活動時の学生間のレベル差を少しでも調整できるように工夫しながら行った様々な活動を紹介し、教材や活動の方法を振り返り考察を行う。本授業のように、学習者間で大きなレベル差がある授業での取り組みの報告が同様の教授者の一助になればと思う。

２．授業の概要及び学習者

本授業は週１回行われ、２クラス開講されている。２つのクラスは、受講生が重複することがない。教材及び活動のための素材はほぼ同じものを使用しているが、受講生の人数の差により進度が異なるため、適宜教材を追加したり削減したりして調整を行った。

受講生は来日前から日本語学習歴があり、日本語授業の受講開始時には日本語能力試験Ｎ１ないしＮ２の合格水準に達していた。また、日本語日本文化教育センターにて学習を始める前の日本滞在年数には個人差があり、皆無～３年と幅があった。口頭表現能力も「上級レベルの語彙の使用が少なく、文法に誤用が見られる人」から「発音・イントネーションがかなりネイ

ティブに近く、談話単位のまとまった話がほぼ誤用なしで可能な水準の人」までと、大きな差が見られた。

各クラスの構成は、以下のとおりである。便宜上、一方をA、他方をBと呼ぶことにする。

クラス	A	B
受講生の出身国・地域	ロシア　2名 ジョージア　1名 韓国　1名 アメリカ　1名 ブラジル　1名 モンゴル　1名 ベトナム　1名 ブルガリア　1名	韓国　2名 香港　1名
受講生数	9名	3名

3．教材

前述したように、本科目では学習者の能力に幅があることを考慮し、特定のテキストを主教材にすることを止めた。代わりに、教室内で習熟度が低い受講生からも発話を引き出すために様々な活動に沿った内容の素材を扱うことにした。しかし、内容を重視して活動を進めるのみならず、言語学習の一環として表現の確実な学習や正確さを意識することを目的に、『日本語口頭発表と討論の技術 －コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために－』、『上級から超級へ日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』、『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』の一部も用いた。時間数は全体の授業の10分の1に満たない程度だった。それ以外の授業時間の大半で、活動内容に即した生教材を用いた。それは、動画、映画のDVD、新聞、白書、各種パンフレット、漫画、絵、歌謡曲の歌詞等であった。具体的には、活動とともに以下の章で紹介する。

4．活動及び考察

授業では、活動や学習素材ありきで、受講生がそれぞれの能力に応じて発話できるような環境作りに努めた。教師が主導して、語彙、表現、文法等を一方的に説明する時間は極力短時間にして、彼らが関心を持つと予想される素材を用い、発話を促した。さらに、各活動において受講生の交流が盛んになる環境を提供することを心がけた。教師がトップダウンで全てを指示するより、受講生達が主体的に活動に参加できるように、彼ら同士のコミュニケーションを重視した。机を並べて共に学習しているクラスメイトが目標言語で円滑な発言をしているのに触れ、学ぶ動機づけにもなるのではないかとも考えた。実際活動中に習熟度に違いがある受講生達が、言語知識を補足し合ったり役割分担をしたりしながら積極的に課題を遂行する姿が頻繁に見られた。

池田・舘岡（2007）では、日本語クラスで学習者同士が仲間と協力して学ぶピア・ラーニングを紹介している。本授業においてもそのような協働作業を重視し、受講生が学習過程で他の受講生と関わる中で学びが進行すると考え、目標言語が使用される文脈とその構成員を意識した。

今回は受講生の学習に関する希望や信念を知り、教師が考える教授活動との差を縮めるため、年度の折り返し地点で活動内容についてのアンケートを行った。

次に、長く時間を割いた順に各活動を紹介し、考察する。

4.1　ディスカッション

ディスカッションでは、司会者の表現及び意見提示の方法、質疑応答の仕方を一通り確認した後で、受講生と教師がテーマを出し合い、その中から皆で選定したテーマを扱った。話し合ったのは、「日本の良さと改善すべき点」「時間とお金は、どちらが大切か」「SNSについて」「AIは我々の仕事を奪うか」「働く意義とは」というテーマであった。どのテーマについても、まず全体でテーマに関する複数のトピックを出し合い、その後関連記事を読んだり、グラフ等の資料を参考にしたり、テーマに関係がある映像を視聴する等して情報を共有した後で、グループに分かれて複数のトピックに沿って議論を行った。その後、教師が言語表現を提示し、教室全体で話し合った内容をグループの代表者が紹介し、他のグループの人と意見交換を行ったり教師がコメントを述べたりして、議論のまとめを行った。テーマによっては、各自が教室外で資料を調べ、意見が述べられるようにしておくという課題も与えた。

具体的には、たとえば、「働く意義とは」というテーマのトピックとして、「働く目的とは何か」「理想的な仕事とは？」「転職に対する考え」「仕事と家庭・プライベートのバランス」「時間外労働の現状」「働き方改革」等が挙げられた。それに関連する資料を配布し、参考として「コンビニ24時間営業見直し」という新聞記事の簡単な読解を行った。

「AIは我々の仕事を奪うか」というテーマで議論を行った際には、「人工知能導入の状況」を資料で調べ、感想を述べ合った。その後、テーマについての意見交換を行い、「奪われる職業」及び「AIに代替されない職業」を推測した。議論終了後に話し合った内容を共有し、教師が関連するランキング等のデータを提示した。最後に、NHKの『クローズアップ現代＋』「“AIに負けない”人材を育成せよ～企業・教育 最前線～」を視聴し、感想を述べ合い、テーマに関する理解を深めた。

受講生の年齢、文化、これまでの経験等の背景が多様であることもあってか、それぞれのディスッカッションで様々な経験や意見を聞く機会が与えられ、受講生同士が積極的且つ協力的であった。日本語能力に関係なく、学生が関心があることなら話したくなるのではないかと予想した通りで、毎回議論は途切れることなく活発に行われた。議論後には「異なる皆の考えが聞けて興味深かった」という声が聞かれた。

今年度の本授業でのディスカッションは最も時間を割いた活動であったが、受講生のアンケートでも「非常に勉強になった」「大変興味深かった」という声が大部分を占めた。しかし、アンケートには「非常に勉強になった」と肯定的な意見を記入した人が、空欄に「難しい」と記入したメモも見られた。今回行ったアンケートは無記名だったため、習熟度がどの程度の受講生が記入したのかはわからないが、ディスカッションのほとんどの素材が日本語学習用ではなく、一般の日本人が目にするものを扱ったため、日本語能力によってはかなり難解なものだったに違いない。皆で決めたテーマであり、教師の解説もあることはあったが、内容に合わせた学習リソースは語彙や表現もかなり高度なものも含まれており、議論の内容に合わせた生

の教材を用いる難しさを感じた。もしかすると、メモした受講生の気持ちは、「自分が考えたことを言葉にして伝えることが難しい」というものだったのかもしれないが、いずれにせよ、困難に感じながらも、肯定的な評価を行った受講生の声に重みを感じる。

4．2　映像を用いた活動

授業では、複数の動画や映画を用いて活動を行った。日本語学習の教室では、様々な教材が学習の助けになるが、映像は多くの言語情報、社会的及び文化的要素を含み、学習意欲を高めるので、優れた言語学習のためのリソースになり得る。

ディスカッションで「日本の良さと改善すべき点」を話し合った後に、漫画『日本人の知らない日本語』の「日本人の知らない日本の良さ」を用いてテーマを掘り下げて考察し、その後、ドラマ「日本人の知らない日本語」を視聴した。

ドラマ視聴時には、消音で時々一時停止をしながら場面を示し、ペアの一方が画面を見ていないパートナーに、ストーリーの展開、登場人物の動作、態度、心情を伝えるという活動を行った。次々と変わる場面を追って口頭で表現するこの練習には、受講生達が既知の言語情報を総動員して時間の制約の中で緊張感を持って取り組んでいた。個別に発話するので、同じ映像の説明でも自分で話す内容を決定し自身が使える言葉で話すため、各ペアにおいて多種多様な表現でパートナーに伝えられた。ドラマの内容も笑いあり涙ありで、教室は大いに盛り上がった。学習者にとって興味深いと思われる素材を準備したのは、ディスカッションの意図と同様で、受講生が「話したい」と思う動機づけを行うことだったが、活動中は教師の予想以上に多くの発話が聞かれた。

映画『ちはやぶる』を使用した活動では、登場人物の紹介、人間関係と複数の人の気持ちを表す表現、あらすじの説明、特定の場面を消音で見てその様子から登場人物の会話を想像し台本を作成した後にペアでその役を演じる活動、５分程度のある話のまとまりを視聴し、内容について受講生が質問を考えお互いに回答する活動、物語終了後のストーリーの予測等、様々な活動を行った。教室ではこの作品の百人一首や競技かるたの文化的要素にも簡単に触れたが、そのような背景にも受講生は惹かれたようだった。

アンケートでは、この映像を用いた活動はディスカッションに次いで好評だった。教える側が内容をはじめ、言語表現の確認や各活動に相応しいかどうかの検討を行い、素材を選択するが、その後教材作成や活動の準備にさらに時間と手間がかかることを考えると、教師の負担は否めない。

映像を扱う授業は、ディスカッション同様、学習者がお互いに学び合う構造が期待される活動である。奥原・保坂（2004）には、「レベル差のあるクラスが一緒に活動する場合、下のレベルの学習者の意識に良い影響がある」（p188）とある。この活動後に追いつくのがやっとと思われる受講生の一人に話を聞いた際に、「（活動の相手になった）○○さんとはクラスが違うから話したことがなかったが、今日一緒に話せて、あんなに日本語が上手な人と友達になれて嬉しい」と話していた。クラスで最も学習が進んでいる人にもクラスの学生間の能力差が気にならないかと尋ねたところ、「たまに下の人とペアがあたった時は『え？』と思うこともある」と答えていた。逆に、同じく習熟度が高い人で「他のクラスメイトの話す能力にはあまり差がなく、全く気にならない」と答える人もいた。学習者の外国語を学ぶスタイルには、それぞれの好み

や効果があるだろうが、授業で与えられた時間に単に相手と口頭で練習するのみならず、教室という一つの社会で人間関係の調整を行いながら、相手の主張を認めたり助け合ったりして、課題を遂行していくことも、言語学習の過程になるであろう。

4.3　発表担当者と教師によるニュースの紹介

この活動は、発表担当者と教師が授業前1週間以内の新しいニュースを動画等を交えてクラスで紹介するものである。紹介の後、教師が語句や背景を説明したり補足を行ったり、受講生間で質疑応答をしたりした。日本で学習していながら国内で起こった出来事に疎いのは残念なことなので、持ち回りで情報を提供する人を決め、最近のニュースや情報を共有した。教師も同様に用意してクラスで紹介した。

この活動は、Aクラスでは特別好評というわけではなかったが、Bクラスでは大変好評であった。Bクラスの学生は好奇心旺盛な人が多く、せっかく日本に滞在しているので、教室の外で起こっている事柄を知りたいと思う欲求と本活動内容が合致していたのかもしれない。

アンケートでどの活動が興味深かったか、また勉強になったかを尋ねた際のこの項目の評価には差が見られた。このように、意見が分かれる活動もあることから、毎回でなくても複数の種類の活動を準備すれば、受講生の好みや学習の信条と一致するものが一つはあるのではないかと考えた。

4.4　国内の観光地の調査・報告

本活動は、グループで指定された範囲の国内の観光地を調べて報告するものである。たとえば、「九州で一番行ってみたい所を調べる」という授業では、グループごとに3つの地域について教師が用意した複数のパンフレットやガイドブック、インターネット等を使って得た情報を整理して、最後に全体で報告し合った。

アンケートでは、全体的にニュースの紹介同様、意見が分かれた。しかし、ある時、クラスでは目立たず、習熟度もそれほど高いとは言えない受講生が、過去に足を運んだことがある地について熱く長時間語ったことがあった。日本語のレベルより興味や話したいという気持ちが先行して発話量を決めるということを実感した場面であった。

4.5　漫画を用いた活動

漫画は絵による視覚効果が大きく、ストーリー性があること、テキストには出現しにくい、生き生きとした口語表現が多く含まれることが特徴であり、人気がある学習の素材である。本授業の漫画を用いた活動では、4.2で述べた通り『日本人の知らない日本語』を扱った。素材のやや高度な語彙に注釈をつけ、話す前段階の情報量の差を埋め合わせることを心がけた。実際の活動では、漫画の中にある擬音語や擬態語の意味を教師が尋ね、内容の理解を確認したり、受講生が面白いと感じた箇所を出し合ったりして、どこがどのような理由で面白いのかを説明してもらったりした。また、登場人物になりきってセリフを言うアフレコを体験する活動も行った。漫画のトピックを再認識しながら、日本事情に触れ、文化的及び社会的知識が得られるようにした。視聴したドラマとの連携によりさらに受講生の理解が深まったことが推測される。

4.6　絵を見て台本を作成する活動

絵は一種の刺激となり、しばしば見る人の想像力を掻き立てるものである。絵を使って、受講生がペアか3人のグループで台本を作成する活動を行った。電車のドアを挟んで立っている男女の絵を見て、相手と相談してストーリーを考え、台本を作成してもらった。受講生達の台本の内容には、記憶喪失になった幼馴染みとの再会の場面、バーチャル世界で暮らしていたが現実の世界へ帰ってしまう男性に恋心を抱く女性、ゲームの世界から飛び出したような登場人物達が出会い力を合わせて箕面幕府を開くまでの話、独特な詩的な世界で二人の状況を繊細に描いたもの等があり、それぞれが自由な発想で台本を仕上げた。台本のセリフを考えている過程では、相互に表現を尋ね合ったりより場面に合った語彙を提案したりする様子が見られた。そして、各チームが自分達の作品を披露する際には、まるで声優のように生き生きと場面に合わせてセリフを読んでいた。

受講生達を見ていると、課題を行う義務感から発話するというより、内側から湧き出てくる感情や考えを自分の言葉に置き換えていく参加型の活動であった。各セリフは、受講生が伝えたい内容を自分の言葉で作成したもので、それぞれのレベルでの表現が産出されていた。また、習熟度が高い受講生の力を借りて、もともとの表現よりやや難易度が高いものとして新たになったものも見られた。

4.7　歌謡曲を用いた活動

この活動は、Bクラスの学生から「授業で歌を扱ってほしい」という希望があったので、教師が曲を選び、時間的な余裕があった当クラスで行ったものである。歌っている大阪出身のアーティストの写真を見せて紹介し、題名から曲のイメージを尋ね、歌詞の語彙と表現を確認した後で全体を音読して意味を問うた。その後、実際に歌を聞き、歌われている内容からテーマを確認し、受講生に感想を聞いた。ある受講生は「少し前に、日本人の友人に、この曲を知っているかどうかを聞かれて、『知らない』と答えたら、不思議がられ、聞くことを勧められたので、聞いてみたことはあった。でも、その時は歌詞の意味が全部はわからなかった」と語り、別の受講生は「自国に好きなバンドが同様のテーマを歌った曲があるが、全く発想が異なる曲になっている」と話していた。歌詞のみを追うのではなく、受講生が体験と結びつけたり既知の情報と比較したりして活動の枠が広がった。

授業後に、「また別の曲を授業で取り上げてもらいたい」との声も聞かれ、本活動に対する受講生の関心の高さが伺えた。

4.8　発音・イントネーションの練習

習熟度が異なる学習者に対する本授業では、学習が進んでいる受講生とそうでない受講生のレベル差を考慮し、個別に指導する機会も持ちたいと考えていたが、なかなか実現には至らなかった。しかし、春～夏学期終了時のアンケートで、Bクラスに「できることなら足りない部分（イントネーション・発音とか）をもっとコメントしてもらいたいです」とコメントした学生がいたことから、当クラスにおいて教材のスクリプトを読む際に、個人個人に、それぞれのアクセントやイントネーションに関する助言を行った。何度か繰り返し練習したところ、非常に反応がよくなった。Bクラスの受講生は3名なので、9名の受講生を抱えるAクラスと比較

すると、このような個別指導が行いやすい。大勢の前では発音やイントネーション等の指導は行いにくいが、時には各学生のレベルを考慮して個別指導を行うことも必要であると感じた。

以上、発話を促す各活動について述べた。

今回のアンケートには、一部使用した市販のテキストを用いての学習を挙げ、各活動とともに、「勉強になった」と感じた順位をつけてもらった。その結果、「テキストを用いての学習」は最下位だった。テキストを使用する時間は、言語表現の知識や言語構造について学ぶものが多く、学習者間の自由なやりとりは制限され、また、短時間とはいえ、単調な作業が続くので、達成感が感じにくかったかもしれない。

今回は短時間でアンケートの記入を依頼したため、自由記述はそれほど多くなかったが、「ニュースを紹介するのはすごくいいと思います」や、グルメ、アイドル、映画の紹介を求める意見等があった。他に「個別に話す機会がもっとあってほしいです」という記述もあったが、書いた人がスピーチや発表のような独話を想定していたのかどうかはわからない。当該年度はピア・ラーニングを意識し、学生同士で学び合う授業を重視したが、一方でこのようなコメントがあったことを記憶にとどめたい。

アンケートを読み終え、教師の担う役割について考えた。教育現場ではつい教授者が主導して言葉を教え込む傾向がありそうだが、今後も今回のようなレベル差があるクラスでは、活動を出発点にして教材を提供し、学習者の豊かな発想や彼らの間のコミュニケーションを大切にしたい。学ぶ側で活発な対話が行われ、学習が促進されるように環境を整えることが教師の役割の一つだろうと考えた。

5．まとめと今後の課題

本稿では、2019年度のＵプログラムの選択科目「口頭表現」のレベル差があるクラスにおいて、発話を促す活動を紹介し、教師の工夫を述べた。学習者の習熟度の違いを考慮し、市販の教材ではなく、活動の素材になるものを主に学習リソースとしたが、授業の各活動において妨げになるほどのレベル差は感じなかった。

ディスカッション及び映像を用いた活動では、アンケートで「非常に勉強になった」「大変興味深かった」との意見が大部分を占め、授業では受講生達が関心を持ったテーマでは発話が促進した様子が見られた。ニュースの紹介と観光地の報告の評価は、意見が分かれた。受講生が好む学習内容や学習方法にも個人差があることがその結果に結びついたのかもしれない。漫画や絵を用いた活動は、ディスカッションと映像視聴につなげて用いたが、絵が学習者の興味を引き発話量が増える傾向があった。漫画と歌謡曲を扱うことは、受講生に日本事情及び日本文化の情報を提供するいい機会にもなる。

本稿では、仲間と学び合う環境を意識したが、今回のＢクラスにおける発音・イントネーションで行ったような個別に対応する時間も必要であることがわかった。

今回は活動全体を網羅したが、機会があれば、活動中の学習者の相互の学び合いの様子をもう少し丁寧に観察して、より効果的な活動のありかたを考えることができればと思う。今後も教室で学習者同士の積極的な交流の中で学びが進むような参加型の活動を提供していきたい。

注

1）大阪大学日本語日本文化教育センター　学部留学生プログラム［U］
https://www.cjlc.osaka-u.ac.jp/japanese/program/u/（2019年10月27日閲覧）

参考文献

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門 -創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
奥原淳子・保坂敏子（2004）「レベル差のあるクラス間にある合同授業の可能性」『講座日本語教育　第40分冊』早稲田大学日本語教育研究教育センター pp.174-194
久保田賢一（2000）『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部
藤井みゆき（2018）「映像を活用した日本語授業」沖縄県日本語教育研究会第15回大会予稿集 pp.28-30

教材及び活動に用いた主な学習素材

「“AIに負けない”人材を育成せよ～企業・教育 最前線～」『クローズアップ現代＋』NHK 2019年４月25日
http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4275/index.html 参照
荻原稚佳子・齊藤眞理子・伊藤とく美（2007）『上級から超級へ 日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク
椙本総子・宮谷敦美（2004）『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』くろしお出版
「ちはやふる」製作委員会（2016）『ちはやぶる －上の句－』（DVD）東宝（株）
東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会（1995）『日本語 口頭発表と討論の技術 －コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために－』東海大学出版会
「コンビニ24時間営業見直し」『日本経済新聞』2019年５月24日
蛇蔵&海野凪子（2009）『日本人の知らない日本語』メディアファクトリー

（ふじい　みゆき　本センター非常勤講師）